

題字 故前田和二郎名誉教授
発行所 東京都新宿区信濃町 35
慶應義塾大学医学部
外科学教室同窓会(刀林会)
発行人 吉野肇一

刀林会理事長就任のご挨拶



吉野 肇一 (44回)

山本修三先輩(38回生)のあとを継ぎ、第20代(名前が判明している範囲で*)。理事長を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

最初のご報告は、会則に則り、副理事長2名を指名し、理事会の承認を受けたことです。熊井浩一郎君(46回)と教室主任*2(本年9月末まで四津良平君、それ以降は吉田一成君)です。

私は、多くはすでに本年6月の総会で申し上げましたが、次のようなことを行いたいと考えています。

1. 山本 前理事長が始められた本会会則・諸規程の再検討と整備
評議員を役員として扱っていること、本会最高意思決定機関の不明確さ(総会なのか評議員会なのか?)、各種委員会委員の選出方法・任期規程および委員会規則の不備などに関して十分な検討が必要です。この作業を、基本問題検討委員会に依頼し、その委員長として熊井 副理事長を指名しました。

2. ホームページ(HP)整備と諸連絡のIT化
せっかく昨年来、教室HPの一隅に本会用のページを頂きながら、「ただいま、制作中です」の状況です。紙媒体の本紙とともに電子媒体として、本会広報活動の両輪を担うべきであり、そのためには現在の刀林新聞編集委員会を広報委員会に改組して、そのなかで本紙とHPがバランスの良い棲み分けのもとに活動していくことが望まれます。これらを含めて、刀林新聞編集委員会に作業を託すべく、委員長に小澤壯治理事(60回)を指名しました。

本間秘書の協力を得て、すでに理事会と評議員会のメーリングリスト体制が出来上がっています。会員各位より刀林会宛メールをお待ちしています。(とうじん-h@a6.keio.jp)

3. 刀林賞選考に関する再検討
自主的な応募は皆無で、各診療科より半ば強制的応募が行われている状況を変革する必要があります。この難事業の遂行のため、刀林賞選考委員会委員長に幕内博康君(49回)を指名しました。

4. その他
本会繰越金の有効な使用(医学部創立100年募金も含めて)、学会募金支援委員会ないし刀林基金運営委員会の常設、総務機能の考慮、大教室制の再確認。さらには2017年の医学部創立100年記念事業準備、刀林会日誌の設置など

以上でお分かりのように、2期6年続いた山本体制下の委員会構成を一新させていただきました。長い間、多大なご尽力をいただいた田中勤刀林賞選考委員長(38回)および小平進刀林新聞編集委員長(42回)ならびに委員の方々に、会員に代わりまして厚くお礼を申し上げます。

既述のごとくやりたいことは山ほどあります。浅学菲才を十分に承知したうえで、これまでの教室幹事、塾看護医療学部部長、塾大学院健康マネジメント研究科長、諸学会役員、専門医制度立上げ、三四会活動などで得た経験・知識をフル動員して、お世話になった刀林会・外科学教室に恩返しすべく、微力を尽くす覚悟です。

会員諸氏の叱咤激励を期待しております。(了)

刀林会理事長を退任して



前理事長 山本 修三 (38回)

平成19年6月、安藤幸史君(45回生)のあとを受けて理事長になり、二期6年を勤めさせて頂き、平成25年6月、退任、吉野肇一君(44回生)に引き継ぐことができました。6年間、理事長としての私に、ご支援ご協力を頂いたことに厚く御礼申し上げます。

理事長になって、さしあたっての課題は、刀林会収支のバランスでしたが、前理事長の安藤君が、収支の改善のため、会費の値上げをしてくださいましたので、会費の徴収率の向上と総会の中身や新聞の費用見直し等で、収支の問題は、ほぼ解決に至りました。

大事な課題は、刀林会の組織と活動の中身の問題でした。これについて、刀林会基本問題検討委員会を立ち上げ、会員の資格、評議員の選出、何かを決定する仕組みなど、過去の理事会、評議員会等で議論された記録を参考にしながら、定款改正を行いました。これに

は委員を始め多くの会員のご協力を得て、定款を改正することができました。

もう一つは、記録の保存の問題でした。1920年の6月にスタートした外科学教室の長年にわたる大事な記録の一部は、紙が風化して、保存に耐えられなくなっていました。また、長い歴史の中で、いろいろな形で記録が残されて来まし

たが、これらをどう保存してゆくかという問題でした。紙媒体とデジタル化で確実に保存するということが、総会で承認され、これを行うことができました。しかし、学会支援の在り方、刀林賞の在り方などの見直しには、残念ながら手がつきませんでした。

6年間でこの程度のことしかできませんでした。最後に、新しい理事長、吉野肇一君に引き継ぎができてほつとしていきます。一大教室制と刀林会の関係は、今後さらに複雑になってゆくとはいませんが、新しい理事長の手腕に期待しています。新理事長に、私同様のご支援を宜しく御願ひ申し上げます。ありがとうございました。



平成 25 年度刀林会総会報告

慶應義塾大学医学部
外科 (心臓血管)

吉武 明弘 (77回)

平成 25 年度刀林会総会は 6 月 22 日 (土) に例年通り ホテル・オークラのアスコットホールで多数の会員の先生方にご臨席いただき、盛大に開催されました。吉武明弘同窓会係 (77 回) の総司会のもと、山本修三理事長 (38 回) の総会開会の挨拶に続き同窓会年間報告で始まりました。冒頭に昨年度ご逝去された会員 15 名の先生方に対しご冥福をお祈りして黙祷が捧げられました。同窓会年間報告に続いて、四津良平教室主任 (52 回) から教室年間報告として教室の現状と人

事についての報告がありました。秋山武紀会計係 (77 回) から平成 24 年度決算報告があり、安藤暢敏君 (50 回) より会計監査についての報告が承認されました。また、平成 25 年度事業計画および予算報告があり承認されました。本年度には、東京医科大学八王子医療センター消化器外科・移植外科島津元秀君 (53 回) が会長を務める第 50 回日本移植学会総会 (平成 26 年 9 月 10 日より 9 月 12 日・東京)、東海大学医学部外科系小児外科学教授である上野滋君 (57



回) が会長を務める第 28 回日本小児救急医学術集会 (平成 26 年 6 月 6 日より 6 月 7 日・横浜)、東京歯科大学市川総合病院外科教授である松井淳一君 (58 回) が会長を務める第 41 回日本隣切研究会 (平成 26 年 8 月 22 日より 8 月 23 日・東京)、慶應義塾大学医学部脳神経

外科教授である吉田一成君 (59 回) が会長を務める第 19 回日本脳腫瘍の外科学会総会 (平成 26 年 9 月 12 日より 9 月 13 日・東京)、岩手医科大学医学部外科科学講座教授である若林剛君 (61 回) が会長を務める第 26 回日本内視鏡外科学会総会 (平成 26 年 10 月 2 日より 10 月 4 日・盛岡) の開催が予定されています。刀林会として開催予定の 5 学会を支援していくことが承認されました。

本年度の刀林賞には 5 研究が選出されました。刀林賞選考委員長である田中勤君 (38 回) より選考課程についての説明があった後、表彰式が行われました。受賞研究は笠原啓史訓 (75 回) の「Postoperative renal function after juxtarenal aortic aneurysm repair with simple cross-clamping」、下島直樹君 (76 回) の「腸管神経再生治療の実験的検討 - 胎仔



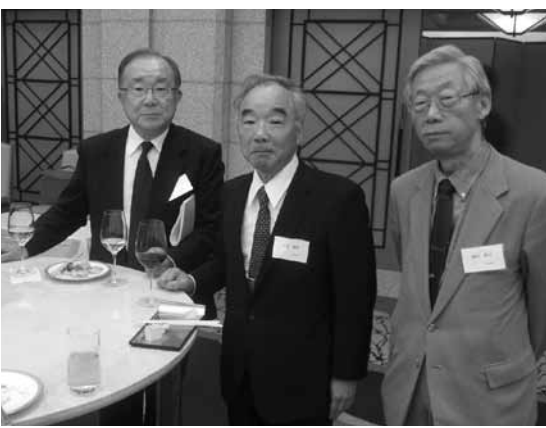
無神経節腸管への神経堤幹細胞移植」、神谷一徳君 (80 回) の「KL-6 and CEA levels in epithelial lining fluid microsamples predict response to gefitinib in patients with advanced non-small cell lung cancer」、高橋里史君 (78 回) の「Downregulation of uPARAP mediates cytoskeletal rearrangements and decreases invasion and migration properties in glioma cells」、吉川貴久君 (82 回) の「High-dose immunoglobulin

preparations improve survival in a CLP-induced rat model of sepsis」の 5 研究に対し山本理事長より賞状と副賞として金一封が授与されました。これらすべて最先端をいく研究であり、今後の外科学のさらなる発展が期待される授賞式となりました。本年度も多くの新入室者を迎え、神野浩光君 (66 回) より新入室者 23 人の紹介がありました。新入室者から

回) より理事長就任のご挨拶をいただきました。講演会は山本理事長司会のもと防衛医科大学外科学講座主任教授である前原正明君 (54 回) より「特定看護師・非医師診療師の導入をめざして」、国立病院機構東京医療センター院長である松本純夫君 (52 回) より「JNP (Japanese Nurse Practitioner) の養成と業務試行事業における実戦配置経験」との題名で現在の特定看護師制度、今後のパラメディカルのあり方につきご講演いただきました。



総会終了後の懇親会は、山本理事長のご挨拶、前田昭二君 (33 回) の乾杯で始まり、ホテルの料理に舌鼓をうちながらご歓談いただきました。恒例のじゃんけん大会が行われ、山本理事長にじゃんけんして勝った方にホテルオークラの食事券やワインなど多くの豪華景品が贈られご満足いただけましたように思います。四津教室主任が抱負を語った後、松井信平君 (87 回) のエールで「若き血」を合唱し懇親会の幕が閉じられました。



慶應連合三田会会長に就任して

「垣根をなくして和の輪をつくろう」



比企 能樹 (37回)

本年5月15日、三田から呼び出しがあり、塾長直々に服部禮二郎さんが逝去された後の慶應連合三田会会長に就任するように要請がありました。正に青天の霹靂とはこのことで、即座に私には荷が重すぎることに、三四会長として2017年の医学部100年記念新病院棟建設のための募金活動に入ったばかりで到底無理であると、言葉を重ねてお断りを致しました。しかし連合三田会名誉会長であられる清家塾長からの要請は数時間に及び、かつて塾長とこんなに長く対面したことはなく、その真摯なご熱意を感じ、遂にお引き受け致しました。

部で、他学部の人々と同じ釜の飯を食い、同じ行動で生活をし、いわゆる寝食共にした学生生活を送りました。そしてそこで学んだ事は、塾は一つであり、一つにならないとボートは前に進まない事を、しみじみと身を以って体験したのである。しかし残念ながらこれまでに様々な場面で遭遇してきたことは、三田と医学部信濃町の、ある一部の人たち何らかのギャップや異和感を意識して、お互いを異なった目で見合っている事もありました。

言うまでもなく、人は自分の考えや生き方を同じくする人々につき合うのは楽で、考えの異なる人と上手くやるのは中々難しいのです。しかしながら相違点を挙げ募つたり、自らの考えを押し付けるのではなく、お互いに何らかの共通点を見出して、折り合つて社会を共に生きることが肝要と考えます。慶應義塾は一つであり、社中は一つであるべきでしょう。

この度、連合三田会会長に就任して、同じ慶應義塾という一つの傘の下で和の輪を作り、お互いに成長し合おうと呼びかけることに致しました。そしてこのコンセプトをもつて、職務を遂行しようと考えます。刀林会、皆さま、何卒応援をよろしくお願いいたします。

もう一つお願いですが、来2017年に迎える、医学部100年記念事業の新病院棟建設の募金が始まりました。皆様の中には既に募金に申し込んで下さった方々もおおいですが、医学部卒業生として、塾員として、塾創立150年記念事業計画から更に進歩発展させた、誇りの病院を造ること、今一度お力をお貸し下さい。建設成就を達成するための募金を、それぞれ垣根を越えて、周りの方々に広く呼び掛けて頂きたいとお願い申し上げます。

平成25年春の叙勲と

日本対がん協会賞受賞



佐久間 正祥 (47回)

1. 春の叙勲

平成25年3月で水戸赤十字病院を定年退職しました。5月10日に春の叙勲を受けました。叙勲など今まで意識したこともなく、一体どんなものなのか、何が理由なのか、考えてみました。私は水戸赤十字病院外科に赴任して33年となり、院長を10年経験しました。昭和55年赴任当時は非常に貧弱な病院でした。医師の数も現在の半分ぐらいで、救急医療も周囲の病院に比べて低下しており、外科も私ども慶應からは3名でした。昭和59年、平成6年、平成15年と新棟を建設、医師も徐々に増えてきました。診療内容の質の向上のため、慶應からは外科、内科の支援をいただき、医師不足でしたが、ようやく地域の核病院となりました。この間、阪神淡路大震災に外科部長として救援に参りました。その後、地元東海村でのJCO事故に対処、中越地震へも医療班を派遣しました。

また、平成23年3月11日の東日本大震災では被災地ではありましたが、岩手、宮城、福島への救援に全国の日赤とともに駆けつけたことなど、今回の受賞には日赤の代表として、また水戸赤十字病院としていたただいたと認識しています。また、茨城外科学会会長、水戸地区救急医療協議会会長、茨城病院協会副会長、ほか茨城県医師会の委員会などに参加し、地域医療にも少しばかり貢献したことなどがあるかと思えます。受賞に恥じないよう地域医療に今後も参加、協力していくつもりです。

個人賞をいただきました。7月に連絡がありました。朝日大賞に元札幌医科大学長、免疫学者菊池浩吉先生、個人賞6名、2団体でした。昭和57年から約32年間にわたり、茨城県総合健康協会で月一回、約250名の胃癌検診の読影に携わってきたこと、茨城早期胃癌・大腸がん研究会の幹事など、地域の消化器検診にいささかの貢献に対しての賞のようです。

私が昭和55年、水戸日赤に赴任した当時、前勤務先の国立霞ヶ浦病院外科医長の35回遠山隆夫先生に読影委員として推薦していただき、以来ダブルチェックで毎月ノルマをこなしてまいりました。読影日は小生の外来日で、大変忙しい日など、

2. 日本対がん協会賞を
いただいた
本年の日本対がん協会の



CHUGAI 中外製薬

Roche ロシュ グループ

抗悪性腫瘍剤
劇薬、処方せん医薬品^{注)}

ゼロータ[®]錠300

Xeloda カベシタピン錠

注) 注意—医師等の処方せんにより使用すること
® F.ホフマン・ラ・ロシュ社(スイス)登録商標

※効能・効果、用法・用量、警告、禁忌を含む使用上の注意、効能・効果に関連する使用上の注意等については製品添付文書をご参照ください。
<http://www.chugai-pharm.co.jp>

製造販売元 中外製薬株式会社 | (資料請求先)
〒103-8324 東京都中央区日本橋室町2-1-1

2009年6月作成

at the Front Line
CHUGAI ONCOLOGY

東京歯科大学市川総合病院 病院長退任



安藤 暢敏（50回）

本年5月末をもちまして病院長を退任し、東京歯科大学市川総合病院を定年退職いたしました。2001年に本学に着任し、その後の12年間の後半6年間は病院長の任にあたりました。病院長就任当時の市川総合病院は、診療報酬マイナス

改訂の影響もあり2年連続赤字という財務状況にありましたが、これに対し社中一致で医療経費の削減など収支改善に励んだ結果、同年度末には黒字回復を示し、新たに採用したDPC制度の追い風も受け、以後堅調に推移するようになりまし

た。同時にこの病院の体力アップを目標に掲げ、とくにソフト面の強化、充実に力を注ぎ、画像配信システムの導入、新電子カルテシステムへの更新を図りました。また2008年には地域がん診療連携拠点病院の指定を受けることができま

した。病院長2期目スタートの2010年には、緩和ケアチーム、栄養サポートチーム（NST）などを中心に、チーム医療の推進をスローガンに掲げ、職域横断的なチームワークを高めました。とくに専門的口腔ケアスタッフが充実している歯科大学の特色を生かした摂食・嚥下サポートチームは、この分野での牽引役になりました。

2011年3月11日の東日本大震災発生時には、合計6回の計画停電を被り、思いがけず大きなダメージを受けました。病院の非常用電源のパワー不足のため、休日への振り替え診療、振り替え手術などのできる限りの対応策を講じましたが、診療規模は通常の15〜20%減少しました。こ

のような非常時のなかで変則的な診療態勢に黙々と取り組み、心を一つにして乗り切った市川総合病院の「絆」の底力に私は感激しました。

病院運営のみならずこの間2009年には、第63回日本食道学会学術集会を主催でき、また日本消化器外科学会や日本食道学会の理事などの学会活動も含め、在任中大過なく職責を全うでき安堵しております。これもひとえに教室からのご支援と、刀林会からは菅貞郎副病院長（61回）、松井淳一外科部長（58回）、申圭範心臓血管外科部長（61回）をはじめ各位のお力添えによるものと、厚くお礼申し上げます。ありがとうございます。

平成25年3月31日に水戸赤十字病院長を定年退職しました。これまで病院紹介で2度、刀林に載せていただいております。昭和50年8月から昭和55年4月まで国立霞ヶ浦病院外科へポストチーフで出張し、昭和55年5月から、当時の外科学教授、阿部令彦先生の命を受け、水戸赤十字病院外科が慶應関連病院となり、小生他、計3名で出張しました。当時は院長の内科、吉澤繁男先生（28回）ただ一人の三四会員で周囲はアンチ慶應の真つただ中に入り込んだ状態でした。内科、小児科、放射線科教室の協力もあり、次第に慶應からの人員も増えま

平塚市民病院 院長退任



平塚市民病院名誉院長
石山 直巳（51回）

この春に、平塚市民病院院長を退任いたしました。「刀林」会員の皆様には、在職中、多大なご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

この春に、平塚市民病院院長を退任いたしました。さらに、平塚市民病院においては、築35年の南棟の耐震診断の結果、早急な対応を迫られました。隣接する市にある伊勢原協同病院もまた、施設の老朽化から、同じように、建て替えなどを検討してまいりました。そこで、当時の伊勢

原協同病院の別所隆先生（50回・外科）と語らって、両病院の統合を画策しました。「両市の中間の場所、土地、建物は、平塚市が提供し、新病院を作る。経営は、民間のノウハウをもつ農協に委託する。医師の多くは慶應関連であり、スムーズにまとまるだろう。今後のマ

ンパワーの確保も容易になり、きつと、いい病院になって、『湘南における慶應の一大拠点』になりうる」と盛り上がりました。

残念ながら、平塚市上層部に「いつ、まとまるか、見通せない話ですね。それまで、耐震の方はどうするのですか？」と、一蹴されてしまいました。これが、後の、別所病院事業管理者の就任につながるようになりました。

当時は、当院のみならず、多くの自治体病院が存在意義を問われ、総務省からは、「公立病院改革プラン」の策定、実施を求められ、当院では地方公営企業法の全部適用を決定しておりました。タイミングよく、伊勢原を退職される別所先生に事業管理者就任をお願いす

ることができました。先生は、医学部出身とは思えないCEO能力を発揮して、経営・企画の近代化、高額医療機器の導入や更新、病院からの情報発信、なによりも、それまで、公務員体質を脱しきれなかった職員

の意識改革などを断行してくださいました。おかげで、私は、「残心の構え」をとることなく、院長の禱を、金井歳雄先生（59回・外科）に引き継ぐことができました。当院には、初代の玉村一雄先生（12回・外科）はじめ歴代院長、別所管理者、金井院長と、慶應外科学教室のDNAが受け継がれております。これからも、「刀林」会員の皆様の温かいご支援をお願いし、退任のあいさつとさせていただきます。

水戸赤十字病院 院長退任



佐久間 正祥（47回）

平成25年3月31日に水戸赤十字病院長を定年退職しました。これまで病院紹介で2度、刀林に載せていただいております。昭和50年8月から昭和55年4月まで国立霞ヶ浦病院外科へポストチーフで出張し、昭和55年5月から、当時の外科学教授、阿部令彦先生の命を受け、水戸赤十字病院外科が慶應関連病院となり、小生他、計3名で出張しました。当時は院長の内科、吉澤繁男先生（28回）ただ一人の三四会員で周囲はアンチ慶應の真つただ中に入り込んだ状態でした。内科、小児科、放射線科教室の協力もあり、次第に慶應からの人員も増えま

した。診療科の関連大学は8大学あり、とにかく外科の症例数を多くしていくことに専念しました。外科の人員も4名から6名と増え、平成25年3月には13名と症例数に応じて増加しました。病棟建設も昭和59年、平成6年、平成13年と行い、徐々に中核病院の体裁を整え、周囲の病院に少しは近づいたと思っております。小生は外科部長から副院長、平成15年から院長として10年間経過しました。外

科医としてもつとむいろいろな手術を数多く経験できなかったことがやや悔やまれます。しかし、複雑で多彩な外科の分野では、ある分野に特化せざるを得ないことと、リスクとの兼ね合いを十分認識することも重要と考えます。

この間、平成7年1月の阪神淡路大震災では当時外科部長として、日赤茨城支部とともに神戸へ医療救護に派遣されました。その後決められた県の基幹災害医療センターの認可も得られました。中越地震では医療救護班を派遣し、心のケアなど看護部とともに活動しました。東海村のJCO事故では院内での放射線被曝の測定など約6000名に行いました。以後、当院では被曝医療に注目し、院内の勉強会など、竹中能文君（54回外科）を中心に継続してきました。平成23年3月11日の東日本大震災、原発事故などでは被曝患者さんへの対応もかなり綿密に対処できたと考えています。医療費抑制のなか、次々と変わる厚労省からの医療制度改革に置いてゆくのが大変でした。第二種感染症指定、エイズ拠点病院

などは以前からですが、DPC対象病院、7対1看護基準の認可、地域周産期母子医療センター、県がん診療指定病院、地域リハビリ広域支援センター、病院機能評価認定施設、基幹型臨床研修病院など、公的病院としての役割を果たすため、国の進める政策医療に乗り遅れないよう医師不足のなか、病院機能を維持してきました。また、平成23年6月には待望の地域医療支援病院の認可がとれました。それに併せて、医療相談支援センターおよび手狭であった産科外来棟を増築しました。

と、なんだかスムーズに進んだようですが、内情は医師特に内科医不足で先行きは不透明です。今後、慶應内科などからの医師派遣が続かなければ、茨城の慶應関連病院は、霞ヶ浦医療センター、茨城東病院に続いて消滅するのでは、と危惧しております。

刀林会、三四会の先生方にはご支援よろしくお願ひ致します。最後に慶應病院の新棟建設が円滑に成功することを祈っております。

日野市立病院 院長を退任して



熊井 浩一郎 (46回)

平成25年3月末にて5年9カ月務めた日野市立病院院長を退任しました。

30年間勤務した私学の慶應義塾大学外科学教室から公営企業法一部適用で純公務員である日野市立病院に赴任する前は戸惑いもありましたが、私の性格からかまったく違和感なくすぐに溶け込めることができました。

平成19年7月院長就任当時は勤務医離れが社会現象化していた頃で、日野市立病院も医師、看護師の定員割れで病院機能は低下し、病院経営は大幅な赤字で深刻な状況でした。ほとんど公立病院が同様の状況下にあり、総務省は平成19年12月経営統合や民営化など経営形態見直しまでも含めた公立病院改革ガイドラインを示し、すべての公立病院は経営健全化を求められました。

日野市立病院は、良質な医療体制の構築と経営健全化を目標として平成20年度から5カ年計画で病

院改革プランを策定し実行しました。幸い市長を始め市議会の全面的なバックアップをいただいたことと、市立病院の再建には市民の理解と協力が是非必要と考え私から設立をお願いした市立病院応援団が順次4団体立ち上がり、市立病院へのかかり方や紹介受診の必要性を口コミで広く市民に伝え、市立病院の継続を訴えていただいたことが大きな力となりました。

院長の第一の役割として医師を始めとする職員人材確保に邁進した結果、市医師会を始めとするかかりつけ医との信頼関係が次第に回復し、機能分担による地域医療連携が進みました。二次救急病院として内科、外科、整形外科が地域のニーズにかなり応えられるようになり、循環器救急、小児救急でも24時間365日の対応が実現しました。一方、経営健全化は、5カ年計画が終了した平成24年度末に経常収支黒字化にはもう少しのところで到達で



関西医科大学枚方病院 院長退任

医療の安全と質のさらなる向上を目指して

— 関西医科大学附属枚方病院院長退任にあたり —



今村 洋二 (46回)

私が関西医大へ着任した平成2年2月1日は、これから進む我が道を暗示していた現金ベースでは平成22年度から赤字に転じています。この間、三四会および刀林会関係各位のご支援は大なるものがあり感謝申し上げます。

院長在任中の平成23年11月には日野市立病院開設50周年を迎え、記念式典を挙げていただきました。思い返せば、慶應での心臓外科医の時代から、私が常に目指してきたことは、「終生現役と新しい手術術式の開発」です。この思いは、胸部心臓血管外科学教室、そして附属枚方病院の開設、運営にも反映されております。関西医大着任当初から、私は、教室員に「われわれの仕事は、賽の河原に石を積んでいるようなもので、毎日の地味な努力の積み重ねが大切であり、一旦、信用を落とせば、積んだ石が崩れるごとく、信用も努力もすべて水の泡と化す。己が、濡れ落ち葉にならないためには、他人に頼

らず、何事も自分で言い、自らの行動には、責任とセルフ・コントロールが必須である」と話し、指導してきました。

この考えを、さらに、私は、附属枚方病院の開設、運営の理念として「イノベーション」と「チーム医療」に発展させました。ここで言う「イノベーション」とは、組織や社会の構造改革のことです。この「イノベーション」をすすめるにあたり、その組織の『Corporate Governance』(企業統治)と『Compliance』(法令順守)の仕組みが問われます。私は、健全な企業ガバナンスをすすめるためには、その組織のトップは、私利私欲に溺れることなく、物事の善悪の判断基準をしっかりと持ち、教養、品格、そしてカリスマ性を持ち、率先して物事をすすめて行く能力が必要と考え、実行してきました。また、正しいコンプライアンスをすすめるべく、倫理の担当部署を設け、行動規範を作成し、

担当役員、リーダーを任命し、内部通報制度の整備などをすすめてきました。さらに、迅速かつ正確な情報収集を行った後、第三者を交えた委員会にて公正な判断を行い、医療の質と安全の向上に役立たせる試みも行ってきました。

『チーム医療』については、医療関係者相互のコミュニケーション不足とチームワークの欠如が問題であり、結果的に、医療の質の低下、医療安全の低下の大きな要因となることを指摘し、きめの細かな現場の意見の収集や業務改善を実行してきました。

免疫抑制剤 (タクロリムス水和物製剤) **プログラフ** カプセル

「効能・効果」「用法・用量」「警告・禁忌」等を含む使用上の注意は、製品添付文書をご参照ください。

製造販売 **アステラス製薬株式会社**
東京都板橋区蓮根3-17-1
[資料請求先] 本社 / 東京都中央区日本橋本町2-3-11

てくれたおかげで、病院は私の考えていた方向に順調に歩み、現在に至っております。この春には、病院の隣接地に医学部新学舎も完成しました。この改革プロジェクト当初から目指した、21世紀にふさわしい医学教育環境の整備が完了しましたので、これを機会に、私は、己の年齢も考え、23年間勤めた関西医大を退職することにいたしました。

関西医大枚方病院は、私が関西医大に奉職した証であり、モニユメントです。そして、他大学出身者の私に、大学の存亡をも左右しかねなかつた大仕事を、任せ、暖かく見守り、支えてくれた関西医大の方々の心の大きさ、深さには、今も深く感謝しております。

私も大阪暮らしが長くなり、最近では「負けたらあかん、東京に！」と天童よしみが「道頓堀人情」が深く心に浸み込むようになりました。

秋田大学医学部 呼吸器外科教授退任



能代山本医師会病院
呼吸器センター長

小川 純一 (52回)

平成25年3月、16年間在籍した秋田大学を退任いたしました。就任当時、刀林メンバーとしては恐らく最北の地の赴任であったと記憶しています。高校までは岡山県、慶應義塾大学卒業後もずっと関東での勤務で

したので、自分で選んだ道と心に言い聞かせながらも雪深い厳寒の秋田に多少戸惑いは感じていました。当初は陸の孤島のごとき印象を持っていましたが、就任して数か月後に秋田新幹線、秋田自動車道が開通し

ましたので随分楽になりました。赴任してしばらくは周囲の人達から「見られてる」という感じが強かったのを覚えています。しかし時間が経つにつれてそれもなくなり、今ではすっかり東北人に溶け込んでいま

す。前任教授は食道外科が専門でしたので呼吸器外科教授としては初代でした。診療は呼吸器・食道に加えて乳腺・内分泌領域も含んでいました。全てをカバーするのは不可能でしたので食道、乳腺は全面的に任せ、私は呼吸器外科に専従しました。勿論教室運営の責任は背負いましたが人面は大変でした。特に大学と関連病院との結びつきは強く、東北大学出身者が多いこともあってかなり気を遣っていました。

医局では診療・研究に加えて、秋田は医師不足が著明でしたので医学生教育に特に力を入れました。慶應時代と違い、座して待つているだけでは入局者は集まらないのです。授業と臨床実習、同時にそれに続くアフターフォローも大切にしました。お陰様で秋田大学の医学科教育賞を何度か受賞できましたし、毎年少ないながらも2〜3名の入局者を迎えられるまでになりました。研究面では磁力を使ったセンチネルリンパ節同定ならびに磁性体を使った温熱療法に力をいれました。まだ臨床応用には道半ばではありますが今後とも継続してくれるものと信じています。

退官後は後継者もすんなりと決まり、現在は東北の病院にお世話になっております。今後も目の続く限りは手術に携わっていききたいと思っています。

第33回日本分子腫瘍マーカー研究会 を開催して



栃木県立がんセンター研究所
がん遺伝子研究室・がん予防研究室

菅野 康吉 (60回)

本年10月2日(水)にパシフィコ横浜で第33回日本分子腫瘍マーカー研究会を開催しました。毎年、色々な学会、研究会を見るにつけて、主催される方々が立派なテーマで開催されるので、どうしたものかと考えあぐねておりました。そうする間に5月の連休も過ぎ、準備に焦り始めました。4月頃、日銀の黒田総裁が就任挨拶で『異次元の金融緩和』と言っていたのを思い出し、『異次元の分子腫瘍マーカー』というテーマで行こうと思いました。重い心を奮い立たせ、『異次元の』という言葉が反芻しながら準備にとりかかったのですが、その後の経済状況を見るにつけて、『異次元』の鮮度が秋まで持つかしらといささかの不安が頭をよぎりました。こけたら馬鹿みたいという言葉が頭の中をサイレンのようにぐるぐる回り始め、結局『次世代分子腫瘍マーカー探索の手法と展開』というテーマに落ち着きました。

シンポジウム、特別講演では海外で活躍する2名の研究者の発表がありました。

シンガポール大学のEyo先生は、血液中から癌細胞を分離して検出する新しいチップの開発について発表されました。余談ですが、このチップの原理はパチンコ台の釘の並び方と玉の動きを見て、思いついたそうです。フレッドハッチソン癌研究センターの谷口俊恭先生はBRCA1/2遺伝子の異常で起きるDNA修復経路の異常と抗がん剤耐性の発現機序について講演されました。いずれも目からうろこが落ちるような斬新な研究でした。最終的に、シンポジウム、特別講演、一般演題等、合わせて38題程度の演題の応募がありました。特に、若手研究者に送られる奨励賞の対象となる発表が19題と多数を占め、今後の若手研究者の活躍を期待させる内容でした。最後に、朝8時から約12時間、私の趣味に付き合っただけで頂いた研究室の皆様のご協力に心から感謝いたします。

久留米大学医学部外科教授退任 —業績集のこと



藤田 博正 (51回)

定年退職を控えたある日、家内に「どうせ捨てられるものを作っても仕様がなくてしょ」と言われ、業績集は作るまいと考えていた。同時期に退任する他の教授の業績集をいただいても、気持ちが変わらな

かった。しかし、次に勤務する病院から、業績を提出するよう求められ、慌てて業績リストを作成することになった。

国立栃木病院出張中、外科部長の富田清児先生から「自分の業績リストを記録す

る。論文が出版された時もコピーをファイルし、タイトルをノートに記載する。別冊が送られてくると、コピーと差し替える。自分の論文は、共著者に必ず手渡すか郵送するよう指導された。そのようにすれば逆に、共著論文を著者から送っていただけ。この習慣は退任まで続け、ほとんどの業績はもれなくノートに記載されていると自負していたが、数編しか漏れていなかった。

定年を一区切りとして業績集を作るかどうか悩まされた。「開運なんでも鑑定団」というTV番組がある。お父さんが骨董収集にのめり込み、お母さんがそれを冷たい目で見ている。お母さんは骨董品を売って、旅行

や美味しいものを食べる費用に充てたいと考えている。一方、お父さんは次に手に入れた物のことを密かに考えている。歌ではないが、男と女の間には超えがたい溝がある。とは言え、家内の一言は重い。

切手、古銭、ミニチュアカー等々、集めるなら完全を期したい。一つでも欠けると気になる、という気持ちにはよく分かる。できるだけ完全なものを作りたい。インターネットで調べ、足りない別冊は著者に電話して送ってもらう。完成に近づけば近づく程、小さな欠陥が気になる。

「大体でいいのよ!時間の無駄!」家内の言葉が聞こえてきそうである。



学会紹介 第81回大腸がん研究会



第81回大腸がん研究会当番世話人
藤田保健衛生大学医学部
消化器外科 教授
前田 耕太郎 (58回)

このたび第81回大腸がん研究会を、平成26年7月4日(金)に名古屋観光ホテル(名古屋、伏見)で開催させていただきますこととなりました。現在、大腸がん研究会では種々のプロジェクトが進行しており、本邦での大腸がん治療や研究の成果を世界に発信し続けています。本研究会をお世話させていただくことは、下部消化管外科を担当してまいりました当外科にとりましても、また直腸がんの外科治療をライフワークの一つとしてまいりました私にとりましても名誉なことと存じており、関係各位の先生方のご配慮に感謝申し上げます。刀林会同門での大腸がん研究会のお世話はこれまでで多くなく、第6回(1977年2月)の小平正先生(栃木県がんセンター)、第19回(1983年7月)の阿部令彦教授(慶應義塾大学)、第40回(1994年2月)の掛川輝夫教授(久留米大学)、第43回(1995年7月)の馬場正三教授、第50回(1999年1月)の小平進教授(帝京大学)、第76回(2012年1月)の固武健二郎先生(栃木県立がんセンター)に次いで7人目になります。慶應の大腸班の恩師であります小平進元帝京大学教授、寺本龍生前東邦大学教授らの指導が実った結果と感謝申し上げます。今回は研究会の主題として、「早期大腸がん治療戦略の新展開」と「高齢者大腸癌(76歳以上)の治療」を予定させていただきました。2011年より「Transanal endoscopic microsurgery (TEM)」が、2012年にはEndoscopic submucosal resection (ESD)と我々が開発したMinimally invasive transanal surgery (MITAS)が保険収載となり、特に直腸早期がんに対する治療戦略に新たな展開が可能となりました。これらの結果や、これまでの早期大腸がんに対する治療成績が討議されることを希望します。もう一つの主題では、高齢化が進む本邦での高齢者大腸癌に対する治療には一定の見解や方針がこれまで明らかにされていいため、本研究会でその方向性が模索されればと考えるております。

る平成26年10月2日(木)〜4日(土)の3日間第27回日本内視鏡外科学会総会、続けて10月4日(土)〜5日(日)の2日間第2回腹腔鏡下肝切除術国際コンセンサス会議を、岩手県盛岡市の4施設で開催させていただくこと



第19回日本脳腫瘍の外科学会



第19回日本脳腫瘍の外科学会 会長
慶應義塾大学医学部
外科(脳神経) 教授
吉田 一成 (59回)

脳神経外科領域において、脳腫瘍は、脳血管障害に次いで頻度の高い主要疾患であり、慶應義塾大学脳神経外科では、全手術数の半数以上を占める重点領域です。日本脳腫瘍の外科学会は、脳腫瘍領域において、日本脳卒中の外科学会に相当する学会として設立され、第19回の日本脳腫瘍の外科学会学術集会を慶應義塾大学が初めて主催させていただきますことになりました。私自身、主に良性脳腫瘍、頭蓋底腫瘍の外科治療を専門として参りましたので、本学会を主催させていただきますことは大変名誉に思っております。会期は、学術集会が2014年9月12〜13日(金、土)、教育セミナーを9月13日(土)、市民公開講座を9月14日(日)、会場は東京ドームホテルです。学会のテーマは、「伝承と革新」、「症例から学ぶ」とさせていただきます。多くの偉大な先人が築き上げてきた脳腫瘍

第27回日本内視鏡外科学会総会 第2回腹腔鏡下肝切除術 国際コンセンサス会議



岩手医科大学外科
若林 剛 (61回)

岩手県沿岸地域は東日本大震災により甚大な被害を受けました。盛岡市は、岩手県経済の中心であり、大震災後に初めて大規模な本会議を盛岡で開催すること、岩手県沿岸地域の復興支援に

とも必要です。この観点から、学内の佐谷秀行教授(先端医学研究所)に国内招待演者をお願いしております。教育セミナーは、主に若手の脳神経外科医を対象として、最先端の脳腫瘍外科手術のノウハウを講演していただく予定です。市民公開講座は、可能であれば、信濃町キャンパス内に会場を確保したいと考えています。慶應義塾大学病院、関連病院に通院される患者様、ご家族など、多くのご参加を期待しております。本学会が、本邦の脳腫瘍の外科治療の発展に少しでも貢献できるよう、実行委員長の堀口崇専任講師を中心に、鋭意、準備を進めて参りますので、刀林会の皆様にもご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

する内視鏡外科手術はこれまで限られた施設のみで施行されるにとどまっております。まだ普遍的とは言えないのが現状です。手術は定型化されて始めて、安全に普及すると考えます。今回の学術集会では多くの外科医が十分なレベルの内視鏡手術を施行できるようにするために、難易度の高い内視鏡外科手術の定型化を行い、これまでの成果を踏まえてどのようなトレーニング方法や器具の開発が必要か、という外科医自身にもやさしい医療であるための技術開発について、異なる領域での成果を統合して新たな方向を提示することを目的とします。また、平成20年に米国ルイビルで開催された第1回国際コンセンサス会議から

第33回日本脳神経外科

コンGRES総会を

振り返って



第33回日本脳神経外科
コンGRES総会 会長・
藤田保健衛生大学医学部
脳神経外科 教授
廣瀬 雄一 (66回)

平成25年5月10日から5月12日まで大阪国際会議場にて第33回日本脳神経外科コンGRES総会を開催致しました。実際には5月9日の総会前日よりプログラムの一部は開始され、4日間に4000人を超える方々の御参加を頂きました。

日本脳神経外科コンGRESは脳神経外科医の生涯教育を目的とする組織ですが、現在の最新の知識を伝えるとともに、その根源となっている思考過程も伝えることが重要ではないかと考え、本総会のテーマは『知』の伝達』と致しました。その考えに沿ってプログラムの中にも治療法の成績や疾患管理の方法紹介のほかに基礎医学的側面をもったものに加えよう試みました。特別セッションとしては最新の神経科学および放射線学的による機能評価、そして脳機能再生についての2つのセッションを設けた他、海外から米国脳神経外科コンGRES会長で機能的脳手術の権威であるAli Rezai教授 (Ohio State University) および脳腫瘍手術の世界的権威であるMichel S.

帰室報告



慶應義塾大学医学部
外科 (一般・消化器)
松原 健太郎 (79回)

私は、2012年4月よりアメリカ、ピッツバーグ大学病理学教室、スターツル移植研究所にて基礎研究留学を行い、この度2013年10月に一般・消化器外科血管班、移植班に帰室いたしました。

ピッツバーグはアメリカ東部のペンシルベニア州に属し、アレゲニー川とモノンガヒラ川が合流する三角州を中心に広がる都市です。かつては鉄鋼の町として栄えておりましたが、現在はピッツバーグ大学やカーネギーメロン大学など全米屈指の大学を有する学術都市として知られております。また物価、治安、交通等の面で住み良い町でもあり、アメリカで最も住みやすい町ランキングで1位に輝いたこともある町です。実際に生活してみても、その住みやすさを実感いたしました。長らく寒い冬が難点であり、最低気温はマイナス20度に達しました。ピッツバーグ大学は、全米でも有数の医療機関を有し、特に肝移植の父トーマス・スターツル先生が活躍した地として有名です。念

願かなって御年86歳の伝説の外科医にお会いする貴重な機会が得られたのはとても良い思い出になりました。私の所属したラボは、脱細胞化の手法を用いた肝臓再生がメインの研究テーマでした。自分の血管外科医、移植外科医としての臨床経験を活かすために、私は顕微鏡下手術による再生肝臓の移植や、再生肝臓の抗血栓性の研究を主に担当いたしました。また、同じ医局の半田寛君(80回生)と同じラボに所属したため、公私ともに仲良くさせていたいただきました。研究留学の生活リズムは、日本で臨床医をしている時に比べると遥かに時間ゆとりのある生活



第44回恙無会 (つつがない会、旧 食研外科研究室同窓会) 報告

丸山圭一・吉野肇一

前回(昨年)より幹事となった丸山圭一(41回)の提案で、原則、毎年5月第3土曜日午後、銀座BRBで開催することになり、今年18日午後12時30分より3時間、27名(前年比マイナス3)が和気あいあいとした雰囲気の中で、札幌では桜が満開、一方、沖縄では梅雨入りと、日本列島の南北の長さを感じながら、銀座では多くの人が、文字どおり五月晴れのもと、中央通りの歩行者天国を満喫していた。

幹事、丸山の司会のもと、ほぼ定刻に、まずこの1年に黄泉の国に旅立ってしまった会員の冥福を期しての黙祷から始まった。今回は、石井良治君亡き後、本会の責任者であった武石輝夫君(31回)が該当した。その後、最年長の前田外喜男君(29回)の乾杯のあと、にぎやかに会は進行した。

比企能樹君(37回)の慶應連合三田会会長就任(詳細は「医学部新聞6月号」、山本修三君(38回)の内閣官房・医療戦略参与就任(一般社団MEJ, Medical Excellence Japan)理事長、同「医学部新聞7月号」、そして吉野肇一(44回)の刀林会理事長就任予定などが紹介され、それぞれより挨拶があった。

恒例によって、会員及び婦人方から、現況、思い出、感想などが、多くのユーモアを交えて述べられた。この中で、未だ現役で手術をされているのは、湯浅鎌介君(35回)のみであり、参加者全員より彼に対して驚嘆と賛辞が送られたことは言うまでもない。

定刻を若干オーバーして閉会となり、来年の再開を期して散会となった。(丸山・吉野記)

前回は快晴で、札幌では桜が満開、一方、沖縄では梅雨入りと、日本列島の南北の長さを感じながら、銀座では多くの人が、文字どおり五月晴れのもと、中央通りの歩行者天国を満喫していた。



BRBで三色旗を拝借し、それに用意した「恙無会」を張って撮影。
前列左より:山本修三、湯浅鎌介、椎名栄一、大槻道夫、前田外喜男、田中建彦、比企能樹。
2列目同:柴崎(旧姓染谷、研究室秘書)、桑野夫人、秋里夫人、佐藤夫人、丸山夫人、船曳孝彦、横山拓也、田中夫人、本橋(旧姓田村、胃鏡室)、比企夫人、船曳夫人
3列目同:鈴木卓二、吉野肇一、古谷健二、榎本耕治、佐藤清、秋里和夫、丸山圭一、鈴木夫人、大槻夫人 以上

病院紹介

独立行政法人国立病院機構

栃木医療センター



院長 勝又 貴夫 (52回)

栃木医療センターは、約200万人の栃木県の人口の1/4が住む宇都宮市の北西の日光街道沿いに位置しています。明治41年に陸軍衛戍病院として開院され、太平洋戦争終戦後の昭和20年に国立栃木病院となり、組織変更に伴い平成16年に独立行政法人国立病院機構栃木病院に変わり、平成25年から栃木医療センターになりました。

現在常勤の刀林会員は院長勝又(S48卒)、小児外科・羽生統括診療部長(S53卒)、外科・田村外来部長(S63卒)、脳神経外科・石原病棟部長(H22卒)のもと外科は松井(H8卒)橋本(H9卒)尾曲(H16卒)星野(H18卒)阿部(H22卒)、脳外科は村上(S55卒)石森(H6卒)峯(H8卒)となっています。

宇都宮で開業されている外科・小林先生(S53卒)、外科植松先生(S54卒)脳神経外科・星先生(H4卒)には、乳腺外科、消化器外科と内視鏡外科、脳

外科でオープンベッド方式により手術並びに手術指導をいただいております。また、済生会宇都宮病院呼吸器外科・田島先生(H5卒)、服部外科胃腸科・服部先生(H10卒)末梢血管外科)にも専門分野での診療援助をいただいております。

私が外科フレマン時代の昭和50年代初頭には、栃木病院は出張希望1位2位を争う人気のある病院でした。

組織の運営には昔から、人・物・金の3要素が関わります。金に関しては過去3年間の赤字経営により投資可能金額が増加し、物である建替え、大型医療機器や手術機器への投資を行っています。

外科手術件数は、S50年925件、S54年1382件(過去最高)S60年724件、H元年775件、H6年657件、H10年333件、H16年384件、H20年421件、H24年428件。

脳神経外科手術数はS50年32件、S55年77件、S61年140件、H元年136件、H5年50件、H10年49件、H16年48件、H20年122件、H24年200件。

小児外科手術数は、H4年172件、H10年271件、H16年235件、H20年152件、H24年87件。

静岡赤十字病院は、昭和8年に開院し、今年で満80年となりました。歴代刀林会会長は、第三代福田榮(32回、脳外科)、第四代山田史(46回、脳外科)、第六代磯部潔(54回、外科)です。10月1日現在、当院の常勤医124名中、三四

件、H16年235件、H20年152件、H24年87件。外科診療のパロメーターともいえる手術数はこのような推移を示しています。

栃木県にある2つの医学部をはじめとする他施設のめぐましい成長に比べて、当院の歩みが遅かったことが低迷の最大要因と考えています。

病院紹介

静岡赤十字病院の紹介



院長 磯部 潔 (54回)

静岡赤十字病院は、昭和8年に開院し、今年で満80年となりました。歴代刀林会会長は、第三代福田榮(32回、脳外科)、第四代山田史(46回、脳外科)、第六代磯部潔(54回、外科)です。10月1日現在、当院の常勤医124名中、三四

会員は、43名で、刀林会員は8名です。院長磯部潔(54回、外科)、副院長森俊治(57回、外科)、東茂樹(特、心臓外科)、西海孝男(60回、外科)、中山隆盛(特、外科)、白石好(72回、外科)、小林秀昭(特、外科)、石井賢二

郎(85回、外科)です。現在、当院は新築中で、平成28年秋に病床数465床で完成予定です。救命救急センターを備え、高度医療に対応できる医療機器と快適な療養環境で、周産期、脳卒中、血管・脊髄、外傷、不整脈、血液・骨髄移植、

この夏、職員に対して職員満足度調査を実施しました。「患者満足度の向上」を目指すには、まず、職員の満足度が高くなるのが不可欠だからです。医療は「人」が「人」に対してサービスを提供し、費用の半分以上を人件費が占める労働集約型産業です。医療の本質は、サービスマネジメントでも「人」にあると捉え、職員を正しく育成し、優れた職員に長く働いてもらう、また、成果を上げている職員

を正しく評価し、褒め、さらなる成長の機会を与えることが大切です。金銭的なインセンティブが使えない非営利組織である赤十字こそマネージメントの本質があると考えます。医師、看護師不足に対しては、やりがいのある職場環境を整え、離職を防ぐことが重要です。

病院紹介

国際親善総合病院



外科部長 亀山 哲章 (72回)

国際親善総合病院は、横浜市西部の泉区に位置する287の地域中核的急性期病院です。経営母体は社会福祉法人で、病院の他に老健や特養も運営しています。当院の歴史は古く、1863年(文久3年)に横浜山手の外人居留地の住民が出資して

始めたYokohama Public Hospitalがそのルーツで、本年創立150周年を迎えました。戦後に横浜管内で現在の病院名で再スタートし、1990年に現在地へ移転しました。97年から掛川暉夫先生(33回)が10年間病院長をお務めになり、亀山哲章(72回)が

2005年に着任し慶大外科の関連病院となりました。慶應義塾大学医学部からは外科をはじめ、整形外科(5名)、放射線科(2名)から教室人事として医師が派遣されています。外科の構成メンバーは、亀山哲章(72回、部長)、富田真人(74回相当、医長)、三

橋宏章(杏林大学)、宮田量平(77回、医長)、馬場誠朗(岩手医科大学)、今井俊一(89回 後期研修医)で、本年6月には安藤暢敏先生(50回)を院長補佐として迎えました。

慶大外科主催の年3回行われている腹腔鏡下手術ハンズオンセミナーでも、そのコーチングスタッフとして若き外科医の指導にあたりています。

当院での後期研修医(D3、D4)は、1年の研修の中で多くの手術のみならず消化器内視鏡検査や内視鏡治療などを指導のもと幅広く行っており、当院は若手消化器外科医として経験を多く積むことができる研修病院であると考えております。

エッセー

親子四代外科学教室



前田病院 院長 前田 昭二 (33回)

慶應義塾医学部は近々創立百周年を迎えますが、開設以来今日までに外科学教室と私の家系は計らずも父、私、長男、孫と四代が在籍する絆があり、この度「刀林」誌の要請によりこれまでの経緯を私事の思い出話になりますが略記します。

大正六年(1917)四月、塾祖福沢諭吉先生が北里柴三郎先生を初代医学部長として慶應大学医学部を創設されるに当り、父前田友助は初代スタッフの一人に選ばれ、東京帝大第一外科(主任近藤次繁教授)より外科学教室創立に参画して微力を盡し、外科教室は大正九年(1920)に設立されました。

医学部創設に盡力したポータスに父は大正八年(1919)慶應義塾派遣留学生として、前年、世界大戦の終結した混乱期のドイツには入国できないため、スイスに赴きBasel大学外科Hous教授の指導下にParabiose等の研究を行って業績はドイツ外科学会誌に発表しました。

大正十年(1921)十一月、二年半の留学を終り帰国した父は、既に六月七日に外科教室が開講され、近藤外科で一年先輩の茂木蔵之助先生が外科の主任教授に任命されていたのを知り驚きました。

当時は外科、整形外科と云っても実際には分科以前の、いわば汎外科とでも云うべき発展途上で、外科は主として内臓、時には開放性骨折や現在の整形領域の手術を行い、整形は脱臼を整復したり骨、靭帯等を保存的に治療し、巷では接骨師が同様の処置を行っていた時代です。

就任後の五年間、父は整形外科在籍とは云え実質的には外科、整形両科の診療、手術を行い、大正十四年(1925)第26回日本外科学会総会の宿題報告「骨折の観血的治療」を担当し、手術後にギプス、副木が不要の前田式骨折接合器を發表、抗生剤の無い時代に術後感染に対する創外固定の有用性を述べました。

整形接骨科教授を五年間務め一応の業績は挙げましたが、大学内の人事関係に馴染めず性格的にも大学人に適さないと自らを判断した父は昭和二年(1927)教授職を辞し、現在地に前田外科病院を開設し、この年に次男の私が生まれました。

戦前の第一次病院でも、戦後の第二次病院でも自分の技術に自尊心を持つ父は「今年卒業した医師と同じ扱いでは納得できない」と経験、技術を無視した保険診療は行わず、但し、相手の身になって自由裁量の行える「赤ひげ」的自由診療を貫きました。

生来頑健な父は開業後十数年間の不屈の努力により赤坂見附前田外科病院の礎を築き上げましたが、太平洋戦争末期には日本国民の誰もが体験した苦難の日々が続き、病院の男子職員は全て出征か徴用され急拠私の姉と姉の同級生が看護婦資格を取り手伝いに入り、既に入局した昭和三十年(1955)でも、大学内は外科、整形外科が別教室でしたが、新人出張先の一部の病院では未だ整形外科の診療、手術を外科が兼務し、骨折手術後の偽関節がよくありました。

昭和二十年(1945)一月、本来ならば前田病院二代目院長の長男弘一(21回)海軍軍医大尉が仏印沖海戦で軍艦「香椎」と運命を共にし、遺骨はもとより遺品すら戻らない24才の悲運の生涯に父は悲嘆の涙を流しました。

運の生涯に父は悲嘆の涙を流しました。更に同年五月の空襲で病院は焼失し、私は結核で富士見高原療養所(院長正木不如丘先生)に入院中で、父のストレスは並大抵のものではなかったと思います。

幸い私は四年間の闘病で快復し、兄の跡を継いで昭和二十五年(1950)医学部へ復学、父も漸く元気を快復して昭和二十六年(1951)第二次前田外科病院を再建、診療を再開しました。

昭和三十年代、復興途上の慶應病院信濃町キャンパスにはまだ戦災の名残が随所に見られました。当時、生化学関田潔教授(9回)は、研究者にとつて大切なのは落着いた環境にある、との信念から第二校舎前の緑化を推進されていて、父が罹災後疎開した樹の多い武蔵小金井の寓居から樹木の移植を希望されました。

The greater the incision, the greater the incision, をモットーに外科医の表芸の開腹手術を鋭意修業する時代で、良好な視野で出血は少なく、短時間に終る手術が目標でした。新人時代の

の或る日、旧別館の大手術場に突然千葉大中山恒明教授が来られ、各手術台を次々に黙って覗かれたこと(院長正木不如丘先生)に並大抵のものではなかったと思います。

その後は昭和三十五年(1960)デュッセルドルフ大学 Prof. Derra の許に留学しましたが、既にその数年前に中山教授は単身来独され、全くアウェイの手術場で開腹手術を披露され、完璧な手術が余り短時間に終るので一同驚嘆した、と手術に加わった助手が話してくれました。

その頃、外科主任教授島田信勝先生(9回)は先見性に富んだ卓見から、今日に通じる小切開低侵襲手術を提唱され、学会では可成り不評でしたが今では先生の予見が全て実現しています。又、島田先生は「内視鏡は外科でやるべき」と主張され、私は東京都医師会会長になられた福井光寿先生(29回)の指導下に、現連合三田会長比企能樹先生(37回)と共にSchindler型軟性胃鏡(プリズム光学系)を用い、時には患者に苦痛を与えて嫌われながら困難で不十分な観察と取組んでいました。

昭和三十六年(1961)欧州留学の帰路ニューヨークでGastroscopeがHirschowitz Fiberscope(1959)をSchindler

の時代になりました。時移り今や国産ファイバースコープが世界を席巻、内視鏡は日本の御家芸となり検査から治療分野に飛躍的発展を遂げ、私共が苦勞して修得したものが無用の長物となったのは隔世の感を抱くのみです。

一方でニューヨーク在住の新谷弘実医師は、従来胃の検査のみに使われたFiberscopeを改良してColonoscope(1967)を設計しX線検査に依存する他なかった大腸検査に内視鏡検査をOne man methodにより施行、更に高周波による大腸ポリプ内視鏡切除(1971)を開発し内視鏡下手術の先駆となりました。

在局中私は専ら古典的内視鏡検査と消化器手術の修得に明け暮れていました。その間学外にも広く眼を向けて千葉大中山恒明教授、癌研梶谷鑑先生、日赤中央病院外科部長 幕内精一先生(幕内博康先生(49回)の御尊父)方の警咳に接し、手技を学ぶ為と同級の故星野喜久君始め同好の士と屢々見学に向い先人の

完成された技を自己研鑽の鑑として大変為になりました。当時、大学病院で痔疾の手術は全て十九世紀に考案された一見根治的に見える閉鎖式のWhitehead法がまだ金科玉條の根治手術でしたが、実際には肛門狭窄などの後遺症が多くMilligan-Morgan(1963)法の開放式手術を導入したところ医局長に「大学ではもっと根治的な手術をしろ」と叱られました。

単径ヘルニア手術は先輩の手術をみて「内単径輪」の局所解剖が理解出来ず、質問しても要領を得ず、成書を見ても判然としないので済生会中央病院出張中、同僚で慈恵医大解剖学教室で学位論文作製中の片野素直先生の御世話で、有志数人とLeicheで単径部の局所解剖を行い合点が行きました。その昔、学一の解剖実習で我々が訳分からず単径部を蔑にして解剖していたところ、実習監督の久保田クラ先生に「御前達、外科医になつたら後悔するぞ」と叱られたのを懐かしく想起、先生は御見通しだったと驚きました。

最近の単径ヘルニア手術は「始めにメッシュありき」で、純粋に解剖学的修復可能な、新鮮な外単径ヘルニアの処置にまでメッシュを入れるのは「糞に懲りて膈を吹く」の感を否めません。以上の臨床的経過は「刀林」80年記念誌に詳述してあります。

余技として昭和三十八年(1963)第63回日本外科学会総会(武田義章教授)がシムボルマークを懸賞公募した際、私のラグビー

募した際、私のラグビー



前田友助



前田祐助 前田昭二 前田京助



前田友助 院長 1927 (昭和 2.10) ~ 1975 (昭和 50)
前田昭二 院長 1975 (昭和 50.7) ~ 2005 (平成 17)



前田昭二 総院長 2005 (平成 17.9) ~
前田京助 院長 2005 (平成 17.9) ~

この年、京助の次男祐助が塾高

大所高所より三代目の運営を補佐する立場になりまし

私は平成十七年(2005)九月、院長職を京助に譲り総院長とな

ボールとJSSを凶案化した口ゴが当選しました。外科学会雑誌が郵送される封筒の表面から諸兄に毎月御目に掛かっている筈です。

の院長となりました。以来、武見太郎先生始め多くの先輩、友人、知人の御支援により病院を存続出

昭和三十六年(1981)現第三次病院の落成に当り、入院中の先生に、今後

は恐縮しました。又、全快後は京助の媒酌の労を取って戴きました。

から医学部に入学、平成二十三年(2011)卒業後二年間の初期研修を終り

式においても古くは伝田先生による Soave-伝田式 endorectal pull-through に始まり、1990年代には森川前教授が腹腔鏡を併用した extranal mucosectomy with pro-

グ病に関する研究の歴史は深く、肛門管の内圧に関する基礎的研究、ヒルシュスプルング病における神経の

無神経腸管に移植することにより手術に変わる新しい治療の可能性を探るとい

このたびは伝統ある刀林賞をいただき、大変光栄に思います。今回の研究テーマ「腸管神経再生治療の実験的検討」

別可能になりました。レシピエント腸管は野生型とヒルシュスプルング病モデルマウスの両方で組織共培養という形で移植を行い、



東京都立小児総合医療センター外科 下島 直樹 (76回)

由来のドナー細胞が移植後、今後とも研究を進展させていきたいと思います。

文化できる段階にあります。先天性の腸管神経系の異常による疾患はヒルシュスプルング病のみならずその類縁疾患も存在し、難治性のもも少なくありません。

観察できました。ヒルシュスプルング病に対する神経堤幹細胞移植の可能性の第一歩が示されました。現在、これを教室の藤村君が、

解析という形で進展させております。腸管運動の担い手は神経のみならずペースメーカー細胞の存在も重要であり、ヒルシュスプルング病においてもペースメーカー細胞に異常をきたしている可能性が

刀林賞を受賞して



荻窪病院
外科
吉川 貴久 (82回)

この度は伝統ある刀林賞を頂き誠に光栄に存じます。今回の論文「High-dose immunoglobulin preparations improve survival in a CLP-induced rat model of sepsis」は重症敗血症に対する免疫グロブリン製剤大量療法の有効性を基礎的に検証するものでありました。敗血症は日常診療でもたびたび遭遇する病態であり、さまざまな基礎的、臨床的研究の進歩にもかかわらずその治療成績はまだまだ満足のものではありません。その病態の悪化には SIRS やサイトカインストームといった言葉で議論される侵襲に対する過剰な生体反応が大きくかかわっており、それをいかに制御するかが近年の炎症の分野における重要なテーマになっております。

一方、免疫グロブリン製剤は実地臨床で使用されて数十年がたつという歴史ある薬剤ですが、その作用機序など明らかになつていない部分も多く、謎の残る薬剤です。今回我々は TTP

などで用いられる大量療法を敗血症に応用することで動物モデルにおいて良好な成績が示すことができました。この研究が今後の敗血症治療の研究の一助となり、治療成績の向上にわずかでも寄与することができれば幸いと存じます。

現在、私は荻窪病院に出向させていただいておりますが、敗血症はそういった一般市中病院でもしばしば遭遇する病態であり、こういった身近な疾患に関する研究をさせて頂いた事は日々、日常診療に身をおく立場としても大変な励みになっており、本当に貴重な経験をさせてくださいと思います。最後になりましたが、この研究において多大なるご指導を賜りました北島政樹名誉教授、北川雄光教授、竹内裕也准教授、須田康一先生、ならびに応募の機会を与えてくださいました栃木県立がんセンター名誉院長尾形佳郎先生に深く感謝を申し上げます。

刀林賞を受賞して



独立行政法人
国立病院機構埼玉病院
心臓血管外科
笠原 啓史
(75回相当)

この度は伝統ある刀林賞を頂き誠に光栄に存じます。ご推薦を頂きました四津教授、論文のご指導を頂きました志水講師に感謝申し上げます。

今回の研究テーマは、動脈瘤の特殊分野である傍腎動脈腹部大動脈瘤に限定した治療法です。腎動脈分岐レベルから瘤化したこの形態ではステントグラフトの適応外となるため開腹手術が選択されます。開腹手術では腎動脈遮断を要するため、腎保護法について議論されます。慶應義塾大学心臓血管外科で施行された傍腎動脈腹部大動脈瘤の外科成績が良好なことに着目し、その治療方法と結果をまとめさせて頂きました。

当科の主な工夫は以下の2点です。まず手術操作を簡素化し、腎虚血時間を短縮すること。さらに可能な症例では、腎動脈間大動脈遮断(左右腎動脈が分岐する中間の大動脈を遮断)により、常に片腎血流を維持することです。これにより平均年齢72歳の連続51例で、1例も腎不全(一過性

刀林賞を受賞して



横浜市立病院
呼吸器外科
神谷 一徳
(80回相当)

この度は伝統ある刀林賞を頂き誠にありがとうございます。大変光栄に存じます。今回の論文 KL6 and CEA levels in epithelial lining fluid microsamples predict response to gefitinib in patients with advanced non-small lung cancer. は、呼吸器内科故石坂教授が開発された気管支鏡下マイクロサンプリングプロベ法を使用して、EGFR 阻害剤である Gefitinib (Iressa®) の投与適応となつた進行肺癌患者に対して、腫瘍周囲と対側肺における気道上皮被覆液 epithelial lining fluid(ELF) 中の KL6、CEA 値を Gefitinib 投与前と後に測定し、同時に画像で治療効果を判定しました。これまで呼吸器領域において液性因子の解析には主に BAL(Broncho-alveolar lavage 気管支肺胞洗浄)が使用されていましたが、生理食塩水が液性因子を希釈し、また目的でない気管支に流入し回収されるため、定量性や精度の問題がありました。同法は目的気管支のみから原液のまま ELF を採取できるため定量・定位性に優れ、低侵襲に肺胞レベルの微小環境を把握・解析できます。本論文では腫瘍周囲における BAL 中両マーカー値の推移の測定で Gefitinib による治療効果の予測が可能であり、血清中の測定より有効であることを示しました。また Gefitinib 投与前の値が

高いと治療効果が大きい傾向があることを示しました。間質性肺炎という重い副作用の可能性を有する Gefitinib 投与の適用を検討するうえで一助となると考えられます。本研究は主に大学でのレジデント時代に取り組んだものですが、慌ただしい一般臨床の中で続けた臨床研究が形になったことに喜びを感じております。今回の受賞を励みとして、今後どのような場でもリサーチマインドを忘れずに一般臨床に取り組み、また慶應外科のプレゼンスを高めていく所存です。

最後となりましたが、小林紘一名誉教授、渡辺真純教授、野守裕明前教授を始めとして多大なるご指導ご支援を賜った皆様方にご場を借りて厚く御礼申し上げます。

院に勤務致しております。glioma に関する研究を続ける環境にはありませんが、脳卒中の症例が多い病院ですので、臨床の合間を縫って脳循環を新たな研究テーマとして、320列 CT と脳血管支配を念頭に置いた自動 ROI 設定ソフトを用いて CT 灌流画像をより客観的に解析する手法により、くも膜下出血後の脳血管攣縮、もやもや病等の慢性脳虚血、更には急性期脳梗塞における脳循環動態を理解し、治療に結びつけられることを目標に研究を行っております。外科学教室の先生方におかれましては今後ともご指導ご鞭撻の程何卒宜しくお願い申し上げます。

刀林賞を受賞して



脳血管研究所
美原記念病院
脳神経外科
高橋 里史 (81回)

この度は刀林賞を頂き誠に誠に有難うございました。伝説ある慶應義塾大学医学部外科同窓会より賞を頂き、大変光栄に存じます。今回賞を頂きました論文は大学院在籍中の

研究成果をまとめたもので、Downregulation of uPARAP mediates cytoskeletal rearrangements and decreases invasion and migration properties in glioma

私の研究について

「脱細胞化臓器骨格を用いた再生医療」



慶應義塾大学医学部
外科（一般・消化器）
八木 洋（77回）

私は2007年9月より北島政樹名誉教授（国際医療福祉大学学長）のご推薦をいただき、米国ボストンのマサチューセッツ総合病院に研究留学をさせて頂いてきました。そこで出会いました再生医療に関わる研究に大変感銘を受け、北川雄光教授の「高配により2010年4月1日より一般・消化器外科教室に入室して以後、本研究に従事しております。本研究はこれまで困難とされていた実質臓器再生を実現すべく、生体組織の細胞をすべて除去して残存する細胞外マトリックス骨格を利用する「Decellularization（脱細胞化）」の技術を用い、そ

こに再度細胞を生着させることで、外科的手技を用いて移植が可能な再生臓器の実現化を目指すものです。近年著しい発展を遂げているiPS細胞を用いた数々の組織工学的手法の中で、この脱細胞化は元々単純な組織構造、すなわち皮膚・気管・血管・心臓弁などで積極的に進められ、一

また本研究はJST（科学技術振興機構）による「再生医療実現拠点ネットワークプログラム（技術開発個別課題）」に採択され、ヒトiPS細胞の臨床応用の実現化という重責を担っております。本研究と幹細胞技術の融合によって究極のオーダーメイド臓器の構築が可能となれば、現在の移植医療がかかえる世界的なドナー不足の問題解決に大きな望みがあるだろうと考えております。

最後にこのような素晴らしい研究環境を与えてくださった北川雄光教授、そして留学の推薦を下された北島政樹名誉教授、及び日頃から大変ご助力をいただいております肝胆膵移植班の皆様にご心よりお礼申し上げます。

診療体系グループ紹介

肝胆膵・移植班（胆道班）



慶應義塾大学医学部
外科（一般・消化器）
板野 理（71回）

肝胆膵・移植班（胆道班）は現在、6名のスタッフ（板野理（71回）、篠田昌宏（73回）、北郷実（74回）、阿部雄太（78回）、日比泰造（78回）、八木洋（78回））で構成され、板野が班長として班全体の臨床、研究、教育を統括するとともに、臨床では板野が肝・胆道、北郷が膵臓・胆道、篠田が移植の各領域の責任者として活動する形をとっています。年間手術症例は約300例で、その内訳は肝切除90例、膵切除35例、肝移植15例などです。班の方向性を示すキーワードとして「全方位戦略」を掲げており、肝胆膵疾患の全ての領域、全ての治療法に偏ることなく取り組み、新たな集学的治療戦略を開発し世界へ発信することを目標にしています。我々の強みとは、①内視鏡手術から移植まで全ての対応でき、各治療利点を組み合わせた柔軟な発想の治療が可能であること、②総合外科医局、総合病院として、各臓器班、各診療科、

藤村匠君（86回）研究奨励賞 受賞報告



慶應義塾大学医学部
外科（小児外科）教授
黒田 達夫（61回）

平成25年9月7日に東京都で開催された第19回大腸肛門機能障害研究会において小児外科学教室の藤村匠君（86回）が研究奨励賞を受賞しました。本研究会は下部消化管の機能性疾患の病態解明や治療に関する討論の場として、1995年に消化器外科、内科、心療

内科の医師らを中心に発足した研究会であり、近年は泌尿器科や小児外科の会員も参加している研究会であります。本年は今後の新しい治療戦略となりうる研究成果についての検討も行われました。同君の受賞演題は「神経堤由来細胞を蛍光標識したマウスを用いた薬剤性ヒルシユスプルング病モデルの有用性に関する検討」です。同疾患は先天的な腸管の神経節細胞欠失による腸管運動不全が原因であり、病態解明の鍵の一つは腸管神経節細胞の起源である神経堤にあると考えられています。同君はこの神経堤に注

目し、神経堤由来の細胞が蛍光標識されるマウスを用いて薬剤性の同疾患モデルを作成し、長期間生存時の神経堤由来細胞を始めとする腸管構成要素の詳細な組織学的な解析や機能的な評価を行い、そのモデルの有用性を示しました。薬剤性の同疾患モデルは古くから存在するものですが、本来の原因、病態と異なる部分もあるとの考え方から詳細な検討はされておりました。実際には、同疾患の遺伝子変異モデルマウスは腸管以外の臓器の奇形が発生し、そのため長期生存が困難という問題を抱えております。それ故に、本モデルは長期生存し、機能評価も可能な貴重なレシピアントマ

ウスとして近年、腸管神経再生医療の分野で再び注目されているモデルであります。同君を含む当教室研究グループは生理学教室の岡野栄之君らと共同で幹細胞移植治療の開発を目指しており、今回その基盤となる研究成果を発表しました。本研究会では細胞の起源に新たに着目し詳細な検討を行った努力と、この研究の発展性が評価され、受賞に至ったと思われまふ。藤村君はこの成果を活かし、今後、再生医療の主役となるであろう幹細胞を用いて、腸管運動不全で悩む小児とその家族を救う新規治療方法の開発を目指したいと抱負を語りました。彼の益々の活躍に期待したいと思っております。

基礎的研究では、ナノ粒子と外部エネルギーを用いたターゲット治療法の開発、NASH 肝臓動物モデルの作成、担癌ブタモデルの作成と臨床に即した手術、M20治療の研究、核内タンパク HMGBI に着目した肝不全治療の開発、脱細胞化臓器骨格を用いた再生医療の開発などを複数の学内外の施設と連携を取りながら行っています。これまで以上に臨床、研究、教育に一致団結して取り組んでいく所存です。引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願ひします。

呼吸器外科

慶應義塾大学医学部
外科 (呼吸器)

河野 光智 (72回)

肺癌の罹患者数は増加の一途をたどり、呼吸器外科の重要性はますます高まっています。先輩方から受け継がれている当科の診療の特徴として、気管・気管支形成術、区域切除術、胸腔鏡下手術などの高い手術技術を有することのみならず、呼吸器内科や放射線科、病理診断部などと協力して達成される高い診断技術、補助化学療法や放射線療法を組み合わせ、最善をめざす個別化された集学的治療を提供出来ること、があげられます。本年9月にはいよいよ呼吸器クラスターとしての診療が開始され、カンファレンスの充実、外科から内科或いは内科から外科へ迅速な連携、内科医と外科医のお互いの診療へのより深い理解などの利点が期待できます。伝統的に呼吸器内科と外科の関係は良好であり、今後は一層、協力体制を進展させ、先進的な治療も含めて患者さんに提供してまいります。関連病院からの、呼吸器外科医の増員や新規派遣の要請は絶えることがあ

内視鏡センター

慶應義塾大学病院
内視鏡センター

中村 理恵子 (79回)

2013年11月現在、内視鏡センターは消化器内科4名、消化器外科2名の専任医師で構成され、それに加えて内視鏡に携わる各科医師(消化器内科、一般消化器外科、呼吸器内科、呼吸器外科、小児外科、腫瘍センター)の協力を得て運営しております。外科スタッフとしては創設当初より2名で構成され、現在は大森泰先生(61回相当)と中村理恵子(79回)が所属し、2名とも上部消化管班として活動しております。内視鏡センターにおける2012年度の検査件数は全内視鏡件数約18000件、うち治療内視鏡約2000件(食道・胃・十二指腸・大腸・直腸のESD・EMRやpolypectomy, hot biopsyを含む)を施行し、精度の高い診断と治療を提供しております。

外科においては専属医師が上部消化管班ということもあり、特に上部消化管領域において精密検査枠を設け、治療前の内視鏡診断を治療方針を含めて的確に行

腫瘍センター

慶應義塾大学病院
腫瘍センター

高橋 麻衣子 (79回相当)

腫瘍センターは、外来治療室、内視鏡部門、遠隔画像診断部門から構成されている「包括先進医療センター」を母体に、外来化学療法部門、放射線治療部門、緩和医療部門、低侵襲療法研究開発部門、リハビリテーション部門の5部門からなる新しい診療部門として、平成21年8月に設立されました。

これまでのがん治療は、診療各科により治療方針が立てられ、縦割りの診療体制がとられてきましたが、腫瘍センターでは患者さん中心のチーム医療を実践するための、診療科の枠を超えた、横断的かつ包括的ながん医療を提供し、様々な領域のがん専門医、専門看護師、専門薬剤師、理学療法士、歯科衛生士、ソーシャルワーカーなどが、ワンフロアに集まることにより、がん治療のみではなく、がんに伴うあらゆる問題に対応しております。「がん専門初診外来」では、がん関連の専門家が集結した臓器別クラスターカンファレンス(がん関連診療科を臓器

近況報告

77回生



国際親善総合病院
外科

宮田 量平

3年間のカナダ・バンクーバー、University of British Columbia 留学を終え平成24年7月より国際親善総合病院外科に勤務させていただいております。内



済生会宇都宮病院
外科 (心臓血管)

保土田 健太郎

刀林会の方々には益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

私は先天性心疾患の治療を志し、都立の小児病院、タイ・チェンマイ大学を経て現在、済生会宇都宮病院に勤務しております。ここで2000年に外科研修医としてお世話になった外科の先生方との再会が非常に嬉しくもありました。当院にはNICUがあり、小児

視鏡手術、内視鏡検査の多い病院で今までに自分に足りなかった部分を補う良い環境です。また亀山外科部長以下、素晴らしい外科スタッフに囲まれ、少数精鋭ですが結実力のあるチーム医療ができています。個人的には子供が3人(5歳、3歳、1歳)で家の中は動物園のような状態ですが週末は楽しく子供達と遊んでいます。最近相模原市に待望の新居を新築しました。今後は臨床にさらに精進しつつ学会発表、論文、基礎研究などのacademicな部分も怠らさずやっていきたいと思います。

循環器科医もあり、新生児手術を行ってきた歴史もあります。昨今の小児医療の充実度には追いつくには時間がかかりますが、栃木県のことも大切にできることを徐々に増やしていきたいと思っています。橋詰賢一科長(七十四回)のもと、小児心臓手術のみならず、冠動脈バイパス術や弁膜症手術など全般に渡って手術機会をいただいております、充実した毎日を過ごしております。近頃、患者の年齢が自分の子や親の年齢に合致するようになりました。

家族は妻、1男3女の6人で賑やかに暮らしていますが、平日は一人暮らしで家事全般に勤しんでおります。3年ぶりの日本の寒さがすでに骨身にこたえ、つらいです。

今後ともどうぞよろしくお願いたします。



東京都済生会中央病院
外科
鳥海 史樹

2004年5月東京都済生会中央病院に赴任して以来、来年で10年目の節目となります。当院は昨年から3次救急がスタートし、2年後には創立100周年、4年後には新主棟が完成(予定)と、転換期をむかえつつあります。そんな中、地域に根差した病院として、『とりあえずあ

病院に行けば何とかしてくれる』と安心してもらえるような病院を目指し、外科では出来る限り何でも受ける体制で動いています。当院では医者3〜6年目の一番伸び盛りの若手外科医が多く、日々彼らからの刺激を受け、それに応えるように指導しつつ毎日切磋琢磨しております。自分自身まだまだ未熟であり、まわりから学ぶ事も沢山あります。

最近、約10年ぶりに引越して、新しい街の散策をするのがちよつとした楽しみです。気づけば人生折り返し、私生活でもやり遂げていない事が沢山あり、少しあせりつつも、一歩ずつ前に進んで行こうと考えております。



慶應義塾大学医学部
外科
林田 哲

平成10年に塾医学部を卒業し、外科学教室に入局させていただきました。フレッシュマン出張の後、肝臓移植班として帰室し、ポストチーフ出張では南多摩病院に1年間お世話になりました。その後、北島前教授のご高配により、米国ボストンのMGHに留学の機会をいただき、乳癌について基礎研究を3年間行つて参りました。帰国に

際して、北川教授のご高配により、初代研究専任スタッフとして2年間乳癌を中心とする固形癌の研究に専念いたしました。平成22年に臨床に復帰するにあたり、北川教授とご相談させていただいて、研究のみならず臨床でも乳癌に専念させていただくこととなり、現在は乳腺班に所属させていただいております。日々の臨床に追われ、自分でピペットを握る機会はなくなりましたが、若い先生方と一緒に切磋琢磨しながら基礎・臨床の文武両道で論文を作成しております。私生活でも、都内の有力病院に勤務する同年代の乳癌外科の先生方と交流を深めたい、慶應病院を受診される乳癌患者様に還元できるよう、楽しみながら情報交換を行っております。

戸塚共立第2病院
外科(心臓血管)
救急科
安西 兼丈

「外科学教室で培ったスキルを国際ボランティアで生かす。」

多くの仲間や先輩、後輩と患者様に向き合い病氣と戦ってきました。優れた技術、豊富な知識、そして的確な判断力を備えた先輩同期の仲間と刺激され研鑽する事ができました。何でもできる外科医になりたいと無我夢中で追いかけ続けてきました。クリーブランドに留学し、海外経験を養い、多くの価値観を学び、念願であった国際協力の門をたた

きました。MSF国境なき医師団で外科医としてミッションに参加し、ミャンマー、ナイジェリア、イラクなどで活動を行なってきました。24時間態勢で、撃たれた人、刺された人、爆弾で受傷した人の治療にあたります。「なぜミッションに参加するのか」とよく聞かれます。ミッションからみると、初心に戻れる気がするので。医師になった日の事を思い出し、患者さんに対する接し方、話し方など自分を見つめ直す事ができる良い機会だと考えています。

皆様の活躍を拝見し、励みになり力にもなっております。これからも慶應義塾外科学教室の繁栄と発展を願っております。



慶應義塾大学
外科(心臓血管)
吉武 明弘

心臓血管外科チーフレジデント終了後、モナコ心臓病センター、東京医療センター、チェンマイ大学(タイ)、済生会横浜市東部病院勤務の後、2011年10月より慶應義塾大学心臓血管外科に勤務しております。大動脈瘤や大動脈解離といった大動脈疾患を専門にしており、従来の外科手術やステントグラフト治

療、あるいはその組み合わせのハイブリッド治療など新しい治療法が数多くでてきている分野であります。また一方、24時間急性大動脈解離受け入れを掲げているので忙しいですが、充実した生活を送っております。

家族は小4長女、小1次女、幼稚園年少長男と非常ににぎやかで楽しいですが、ほとんど妻に任せっきりでダメ親父です。まだまだ半人前ですが、ここまでやってこられたのもご指導いただいた数々の先輩方のお陰と感謝しております。今後は後輩の教育や、自分自身も人間として成長していかなければと思っております。今後ともご指導のほどよろしくお願ひ申し上げます。



慶應義塾大学医学部
外科(脳神経)
秋山 武紀

平成17年から21年まで美原記念病院にお世話になった後、現在に至るまで慶應義塾大学脳神経外科に勤務しております。美原記念病院では一般脳外科手術に加え、脳血管内治療、ガンマナイフなど専門性の高い分野を習得させていただき脳外科医としての幅を広げることができました。大学帰

室後は脳外科救急に携わりながら、手術、脳血管内治療などを行っております。平成23年から脳血管内治療部門の責任者をさせていただき、自分自身の技術向上から始め、今後は慶應大学の名に恥じない高いレベルの治療を目指していきたいと考えています。また医学生への臨床実習、専修医指導も重要な任務です。医学生に対してはとっつきにくい脳神経外科の魅力を伝えること、専修医に対しては自ら進んで成長していつてもらうように心掛けています。



慶應義塾大学医学部
外科(一般・消化器)
八木 洋

私は1998年に医学部を卒業後、外科フレッシュマンを経て、芳賀日赤病院、国家公務員共済組合連合会立川病院へ出向し、2001年レジデント、2003年には京都大学医学部移植外科への短期留学を経験し、その後チーフレ

ジデントを経て2004年日野市立病院に出向いたしました。その間学位を取得させていただきました。2007年ボストンのマサチューセッツ総合病院へ研究留学をさせていただきました。その後、2010年4月より現職(外科学(一般・消化器)肝胆移植班スタッフ)につかさせていただきました。すばらしい同僚やチームに恵まれながら、臨床・研究・教育に邁進しております。また留学生係、初期臨床研修担当を仰せつかっておりますため、日々各国の様々な学生や来訪者および研修医から刺激を受け、逆に多くのことを学ばせて



「効能・効果」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「用法・用量」、「用法・用量に関連する使用上の注意」、「禁忌を含む使用上の注意」等については、添付文書をご参照ください。

5-HT₃ 受容体拮抗製吐剤 創薬、処方せん医薬品(注意一医師等の処方せんにより使用すること) 薬価基準収載

プロキシ 静注 0.75mg Aloxi. i.v. injection 0.75mg

プロキシ 点滴静注用バッグ 0.75mg Aloxi. i.v. infusion bag 0.75mg

パロセトロン塩酸塩注剤 製造販売元 大鵬薬品工業株式会社 101-8444 東京都千代田区千代田1-27 TEL.0120-20-4527 FAX.03-3293-2451 http://www.taiko.co.jp/ 提携元 HELSINN スイス 2013年7月作成

外科学教室 新入室者紹介

90 回生



さいたま市立病院

東 尚伸

出身校：私立灘高校
出身大学：慶應義塾大学
クラブ：剣道部



伊勢原協同病院

林 雅人

出身校：慶應義塾高等学校
出身大学：慶應義塾大学
クラブ：趣味：空手

この度、慶應義塾大学医学部外科学教室に入室させて頂きました90回生の東尚伸と申します。現在はさいたま市立病院で研修をさせて頂いております。先生方からの熱心なご指導を頂ける毎日に感謝すると同時に、少しでも早く一人前になれるよう、精一杯努力して参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



永寿総合病院

安藤 知史

出身校：開成高校
出身大学：慶應義塾大学
クラブ：野球、ダイビング、旅行

この度、慶應義塾大学医学部外科学教室に入室させて頂いたことになりました90回生の安藤知史と申します。卒業2年間は済生会宇都宮病院で初期研修を行い、現在は永寿総合病院で研修させて頂いております。私は理論的に物事を考えることはできませんが体力には自信があるので、今後とも力一杯全力疾走で何事にも精進していきたいと思っております。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



埼玉社会保険病院

鴛沢 一徳

出身校：栄光学園高等学校
出身大学：慶應義塾大学
クラブ：趣味：野球部

この度、慶應義塾大学医学部外科学教室に入室させて頂いたことになりました90回生の鴛沢一徳と申します。済生会横浜市東部病院で初期臨床研修を行い、現在は埼玉社会保険病院で研修をさせて頂いております。不器用な私ですが、諸先輩方に忍耐強くご指導をいただき、充実した日々を過ごしております。今後ともご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。



日本鋼管病院

鈴木 博史

出身校：慶應義塾高等学校
出身大学：慶應義塾大学
クラブ：趣味：硬式テニス部

この度、慶應義塾大学医学部外科学教室に入室させて頂いたことになりました90回生の鈴木博史と申します。済生会宇都宮病院で初期臨床研修を行い、現在は日本鋼管病院にて外科専修医として研修をさせて頂いております。諸先輩方の温かい御指導を賜り、日々充実した研修を送らせていただいております。今後とも御指導御鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。



川崎市立川崎病院

徳田 敏樹

出身校：開成高校
出身大学：慶應義塾大学
クラブ：趣味：ヨット部

この度、慶應義塾大学医学部外科学教室に入室させて頂いたことになりました90回生の徳田敏樹と申します。済生会宇都宮病院で初期臨床研修を行い、現在は川崎市立川崎病院で研修させて頂いております。先生方のご指導のおかげで日々成長させて頂いております。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



東京医療センター

雨宮 愛理

出身校：桜蔭高校
出身大学：横浜市立大学
クラブ：趣味：ヨガ・ランニング

この度、慶應義塾大学医学部外科学教室に入室させて頂いたことになりました90回生の林啓太と申します。済生会横浜市東部病院で初期臨床研修を行い、現在は富士重工健康保険組合太田記念病院で後期研修をさせて頂いております。まだまだ未熟者ではありますが、諸先輩方からの温かいご指導を毎日ひとつでも多く吸収し、慶應義塾の名に恥じぬ外科医となれるよう日々精進して参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



太田記念病院

林 啓太

出身校：慶應義塾志木高等学校
出身大学：慶應義塾大学
クラブ：趣味：水泳部

この度、慶應義塾大学医学部外科学教室に入室させて頂いたことになりました90回生の雨宮愛理と申します。現在は東京医療センターで諸先輩方からご指導をいただきながら充実した日々を過ごしております。外科医として一歩ずつ成長できるように努力して参りますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



東京医療センター

前田 祐助

出身校：慶應義塾高校
出身大学：慶應義塾大学
クラブ：趣味：野球部

この度、慶應義塾大学外科学教室に入室させて頂きました90回の山川輝記と申します。済生会横浜市東部病院で初期臨床研修を行いました。現在は東京都済生会中央病院にて充実した日々を過ごしております。外科医として1日でも早く成長し社会に尽くせるよう頑張っております。今後ともご指導ご鞭撻のほど御願い申し上げます。



東京都済生会中央病院

山川 輝記

出身校：Northern Valley Regional High School (米国、ニュージャージー州)
出身大学：慶應義塾大学
クラブ：趣味：サッカー部



足利赤十字病院

長原 望

出身校：桐朋女子高等学校
出身大学：東海大学
クラブ：趣味：サッカー部 (マネージャー)

この度、慶應義塾大学医学部外科学教室へ入室させて頂きました90回相当の長原望と申します。現在は足利赤十字病院にて諸先輩方の温かい御指導のもと、多くの経験を積み、充実した研修をさせて頂いております。まだまだ未熟者ですが、少しでも早く一人前の外科医になれる様日々努力して参りますので、今後とも御指導御鞭撻の程、宜しく御願い申し上げます。



静岡市立清水病院

徳田 佑紀奈

出身校…北海道立岩見沢東高校
出身大学…獨協医科大学
クラブ・趣味…バスケットボール部



公立福生病院

中野 容

出身校…都立駒場高校
出身大学…岡山大学
クラブ・趣味…ソフトテニス部



東京医科大学
八王子医療センター

林 可奈子

出身校…神奈川県立湘南高校
出身大学…東京医科大学
クラブ・趣味…合気道部 バスケットボール

このたび、慶應義塾大学医学部外科学教室に入室させていただくことになりました、90回生相当の林可奈子と申します。
慶應義塾大学病院で初期臨床研修をおこない、現在は東京医科大学八王子医療センターで研修をさせていただいております。外科の諸先輩方に熱心なご指導をいただきながら、少しずつではありますが日々成長できるような努力している次第です。
今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



日野市立病院

天田 塩

出身校…群馬県立前橋高等学校
出身大学…慶應義塾大学
クラブ・趣味…卓球部



慶應義塾大学医学部

平田 雄紀

出身校…慶應志木高等学校
出身大学…慶應義塾大学
クラブ・趣味…サッカー部

このたび慶應義塾大学医学部外科学教室に入室させていただきますことになりました、90回生相当の稲葉佑と申します。初期臨床研修時代に外科学に興味を持ち、外科医になることを決めました。現在は稲城市立病院で専修医として研修させて頂いておりまして、一症例一症例を大切に成長していきたいと思っております。今後とも御指導御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



稲城市立病院

稲葉 佑

出身校…駒場東邦高校
出身大学…京都府立医科大学
クラブ・趣味…ヨット部



浜松赤十字病院

坂巻 寛之

出身校…学習院高等科
出身大学…日本大学
クラブ・趣味…アメリカンフットボール部

このたび慶應義塾大学医学部外科学教室に入室させていただきますことになりました、90回生相当の坂巻寛之と申します。現在は浜松赤十字病院で後期研修を受けております。諸先生方のご指導を受け、多くの症例を経験させて頂き、充実した日々を過ごしております。
未熟者ですが、少しずつ成長できるよう、精進いたしますので、ご指導、ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。



練馬総合病院

小泉 亘

出身校…慶應義塾高校
出身大学…産業医科大学
クラブ・趣味…ラグビー部

都立駒込病院で初期臨床研修を行い、現在は練馬総合病院で研修をさせていただいております。しっかりと基礎を築くことのできるように、日々修練を積み重ねていきたいと思っております。今後ともご指導の程、宜しく申し上げます。



多摩丘陵病院

伊吹 省

出身校…慶應義塾高校
出身大学…慶應義塾大学
クラブ・趣味…ゴルフ部

このたび、刀林会に入会させて頂きました、慶應義塾大学医学部出身の伊吹省と申します。僭越ながら90回相当の学年幹事を務めさせて頂いておられます。今後とも、御指導ご鞭撻の程、宜しく申し上げます。



川崎市立井田病院

益田 悠貴

出身校…徳島文理高等学校
出身大学…徳島大学
クラブ・趣味…サッカー部・ゴルフ部

このたび、慶應義塾大学外

科学教室に入室させて頂きました90回相当の益田悠貴と申します。初期臨床研修を公立昭和病院で行い、現在は川崎市立井田病院にて研修をさせて頂いております。外科医としてのスタートを切り、外科の奥深さを感じつつ、諸先輩方からのご指導を頂きながら充実した日々を過ごさせて頂いております。一人前の外科医となれるよう精進してまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどを宜しくお願い申し上げます。

このたび慶應義塾大学医学部外科学教室に入室させていただきますことになりました、90回生の天田塩と申します。現在日野市立病院にて勉強させていただいております。日々確実に成長できるよう精一杯努力して参りたいと存じます。今後ともご指導ご鞭撻の程何卒よろしくお願い申し上げます。

このたび慶應義塾大学医学部外科学教室に入室させていただきますことになりました、90回生の平田雄紀と申します。現在は北里研究所病院外科で諸先輩方の温かいご指導を賜り研修をさせて頂いております。伝統ある慶應外科の一員として誇りを持ち、謙虚にひたむきに精進して参りたいと存じます。ご指導ご鞭撻の程何卒よろしくお願い申し上げます。



済生会宇都宮病院

豊田 尚潔

出身校…慶應志木高等学校
出身大学…慶應義塾大学
クラブ・趣味…ラグビー部

このたび慶應義塾大学医

学部外科学教室に入室させていただきますことになりました90回生の豊田尚潔と申します。現在は済生会宇都宮病院で外科1年目の研修をさせて頂いております。研修では先生方に熱心にご指導いただき日々新たに学ぶことばかりで、充実した毎日をごさせて頂いておられます。まだまだ至らぬ点多くありますが、先生方のご指導に比べ一人前の外科医に早くなれるよう全力で精進いたします。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



Table of editorial board members with names and terms of office (e.g., 渡辺 真純, 64回).

Table of editorial board members with names and terms of office (e.g., 今井 俊一, 89回).

評議員名簿 (平成25年度〜27年度)

Table of advisory board members with names and terms of office (e.g., 理事 山本 修三, 46回).

刃林会 理事 (平成25年度〜27年度)

Table of hospital departments and staff (e.g., 初診外来, 一般・消化器外科).

慶應病院 外来 外科担当表

Table of hospital departments and staff (e.g., 特殊外来, 月食道・胃).

Table of staff members and their terms of office (e.g., 北条 一字君, 47回).

訃報

Table of deceased staff members (e.g., 原 眞一君, 62回).

開業 (Opening) announcement for various medical services.

Table of staff members and their terms of office (e.g., 宮崎 洋史君, 64回).



Table of editorial board members (e.g., 委員長 小平 進).

編集後記 (Editorial Afterword) with text and a logo.

GlaxoSmithKline advertisement for Tykerb Tablets 250mg (抗悪性腫瘍剤).

Advertisement for blood products (献血 ウェンoglobulin IH5% and ニアート).